

続・ 珈琲の思い出 37

鈴木優子

「ねえ、和樹さんはお休みの日っていつですか？」

「基本的に土日祝日ですね。優子さんは？」

「私も同じです。ただ、忙しい時期になると土日出勤で、代わりに平日がお休みの時もあります。」

「仕事が終わるのはいつもあのぐらいいの時間？6時頃？」

「うん、大体ね。あ、でも、先週から実は週に1回夜にヨガを習いにいくようになったんです。」

「ヨガ？へえ、健康的だね。」

「そうなの、私、書店ではわりと体を使う重労働してるんだけど、最近全く運動不足で太ってきちゃって……。」

「そんなことないよ。僕なんか完全に中年太りのおっさんだよ。で、ヨガってどう？曜日とか決まってるの？」

「ヨガね、気持ちいいですよ。体をうんと伸ばしてストレッチする感じ。呼吸法とかもあるし。あ、火曜日の夜です。」

「ストレッチかあ、気持ちよさそうだなあ。」言いながら和樹は猫のようにうつぶせになり、細く息を吐きながら腰をそらせてストレッチをする優子の姿を想像して、思わず興奮してしまいました。

「うん、和樹さんはどうですか？一緒にヨガしませんか？」

「え？僕、うーん、したいけど、時間的にちよつと難しいかなあ。」

「そうですね……。残念……。」

「あ、でも火曜日だね？教室ってどこらへん？」

「駅前の商店街ですよ。うちの店からも近いから仕事帰りに行けるな、と思つて。」

「そっか、じゃあさ、たとえばの話、そのヨガ教室が終わってから僕と会うってこともできるの??？」

「えっ……??？」

「一瞬困った顔をした優子に向かって慌てて和樹は言った。『ごめん、ごめん、そんなこと言われても困るよね。ホントごめんなさい。』」

「いえ……。私、子供もいるし、あんまり遅くなれないので……。だけど……。」

「だけど?」

「和樹さんにはもつと会いたいな、と思つて。」

「僕もだよ！優子さん。」(続く)